
 学 会 記 事

第 252 回新潟外科集談会

日 時 2001 年 5 月 12 日 (土)
午後 1 時 30 分～午後 5 時 18 分
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

一 般 演 題

1) 巨大腫瘍を呈した胃内内分泌細胞癌の 1 例

西村 淳・金子 耕司
清水 孝王・岡田 貴幸
青野 高志・武藤 一朗 (県立中央病院)
長谷川正樹・小山 高宣 (外科)

症例は 68 歳男性。他院にて胆石の診断で経過観察中、腹腔内腫瘍を指摘されたが本人が精査を希望せず、6 カ月間放置していた。今回、上腹部腫瘍を主訴に当院を受診した。腹部 CT にて巨大な胃腫瘍を認め、肝外側区域への直接浸潤が疑われた。上部消化管造影、上部内視鏡検査では、胃小彎側の粘膜下腫瘍を認めた。生検では Group I の診断であった。また、ERCP、腹部 CT にて胆管腫瘍が疑われた。胃全摘、肝外側区域合併切除、リンパ節郭清及び、肝外胆管切除、リンパ節郭清を行い、double Roux en-Y 法にて再建した。切除標本の病理組織検査にて胃内内分泌細胞癌と診断された。胆管腫瘍は、胆管癌であった。胃内内分泌細胞癌は報告が少なく、本症例のように巨大な発育を示すものは稀である。若干の文献的考察を加え報告する。

2) 高度進行・再発食道癌に対する化学療法の効果

内藤 哲也・西巻 正
桑原 史郎・小杉 伸一
伊藤 寛晃・中川 悟
神田 達夫・鈴木 力 (新潟大学)
畠山 勝義 (第一外科)

当科では高度進行・再発食道癌に対し、切除率、延命効果の向上を図るため FAP/FAN 療法 (n=12)、Nedaplatin/5-FU 療法 (n=3) を施行している。

臨床効果は奏効率 53% で、切除率 80% であった。一方、毒性で顕著なものはなく、Grade 3 が 2 例、Grade 2 が 8 例、Grade 1 が 3 例にとどまっている。今回、Nedaplatin/5-FU 療法が著効し、根治切除が可能となった Stage IVb 食道癌 T4N3 (頸部上縦郭リンパ節) M1 (両側肺転移) の一例を報告する。本例に対し、Nedaplatin/5-FU を 4 コース施行し、画像上 CR と判定された。切除標本では食道表層に癌遺残を認めるのみであった。

3) 減圧胃瘻挿入下での経口摂取が有用であった上部消化管悪性狭窄の 3 例

大日方一夫・高橋 聡
篠川 主・鵜飼 勉 (南部郷総合病院)
佐藤 巖 (外科)

金属ステント挿入不可能な悪性腫瘍終末期の上部消化管狭窄 3 症例に対して減圧目的に内視鏡的に胃瘻を造設し、積極的に経口摂取を行った。症例 1 は 67 歳男性、S 状結腸癌再発による十二指腸水平部狭窄。症例 2 は 83 歳女性、膵頭部癌による十二指腸狭窄。症例 3 は 55 歳男性、手術不能の胃体下中部癌による完全狭窄である。全栄養は IVH から摂取することになるが、症例 1、3 では 7 分粥軟菜、おやつが摂取でき、食後には満腹感が得られた。症例 2 は 5 分粥が摂取でき、全例十分に満足し、終末期の QOL 向上に有用であった。症例 3 で一日血糖を測定したが各食事前後で変化は認めなかった。満腹感には視覚、嗅覚、味覚、口腔内から胃内の刺激によるホルモン分泌の関与も示唆された。

4) 食道癌、原発性十二指腸癌を伴った 6 重複癌の 1 例

大橋 優智・飯合 恒夫
林 光弘・渡辺 直純
鈴木 全・白井 良夫 (新潟大学)
畠山 勝義 (第一外科)

【目的】大腸癌、食道癌、胃癌の術後経過中に発見された原発性十二指腸癌の一例を経験したので報告する。
【症例】57 歳、男性。家族歴：特記すべき事なし。既往歴：45 歳時、大腸癌にて他院で右半結腸切除術、S 状結腸切除術を施行された。53 歳時、当科で食道癌、早期胃癌に対し経裂孔の食道切除術、胃部分切除術、胃管による再建術を施行した。現病歴：術後経過観察中に上部消化管内視鏡検査で十二指腸水平部に隆起性病変を指摘さ